新庄徳洲会病院

褥瘡対応やリハビリなど

医師に頼らない医療

医師不足に悩む医療機関は全国的に見受けられるが、とくに深刻なのが離島・へき地。しかし、医師が少ないことを嘆くのではなく、〝医師に頼らない医療〟という逆転の発想で地域医療を支えているのが新庄徳洲会病院（山形県）だ。

「２００５年に院長に就任した際、限られたマンパワーで地域に貢献するには、周囲が実施していない、かつ医師に依存しない取り組みが必要と考えました」と、同院の笹壁弘嗣院長は振り返る。

そのひとつが褥瘡（じょくそう）対策。重度の褥瘡で入院する患者さんが多いことから、05年に委員会を設立した。

毎週月曜日に行う褥瘡回診

特定のメンバーや職種に偏らないようにとの配慮から、全病棟看護師をはじめ理学療法士（ＰＴ）、言語聴覚士（ＳＴ）、管理栄養士、臨床検査技師、薬剤師、訪問看護師などが参加。

毎週月曜日に笹壁院長とともに褥瘡回診を実施している。「笹壁院長が『皮膚の傷は全部見るよ』と言って、回診を行うようになりました。初期段階で褥瘡が見つけられるようになり、職員の意識がぐっと向上しました」と、八鍬恵美・看護部副主任。

八鍬副主任も笹壁院長に刺激を受け、09年に皮膚・排泄（はいせつ）ケア認定看護師の資格を取得した。しかし、中心的な役割ではなく、サポート役を心がけているという。

「相談を受けたら、原因や対応法を一緒になって考えます。自分がいなくても対応できるようになってほしいからです」（八鍬副主任）

八鍬副主任はマニュアルも整備し、褥瘡への対応法を統一。さらに「ご家族から、どこにかかればいいのかわからないとの声を聞くので、電話相談の体制を整えました」と、今年に入り「床ずれ１１０番」を開設した。

地域の診療所や介護施設からの相談も増え、「他施設との連携が進みました」と、八鍬副主任は嬉しそうに話す。

さらに笹壁院長はリハビリテーションにも注力。回復期リハビリ病棟を開設し、通所リハビリや訪問リハビリなど在宅系のサービスも開始した。同院のリハビリスタッフは地域で最多の35人を擁している。

「周りが行っていないことを実践していきたい」と笹壁院長。今後はさまざまな在宅サービスを武器に、〝医師に依存しない〟体質を一層強化していく考えだ。